

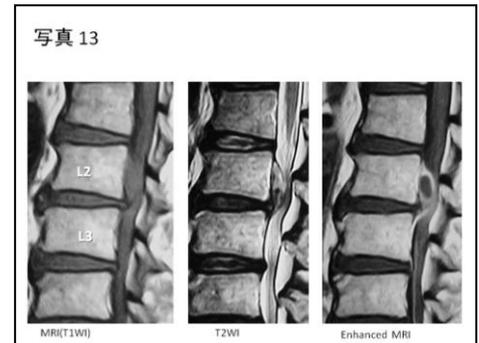
問題 1 (写真 13)

症例：50 歳台の男性

主訴：高度な腰痛、左下肢痛（大腿前面）

現病歴しばらく腰痛が続いた後、突然下肢への激痛が走り、痛みが持続するとともに両下肢のシビレ感も伴った。

MRI では L2 の後方に椎間板と同じ吸収域の腫瘤が脊椎管に認められた。Mass は T2WI では heterogeneous intensity を呈した。造影 MRI では mass lesion は low intensity を囲むように ring enhancement が示された。



(写真 13)

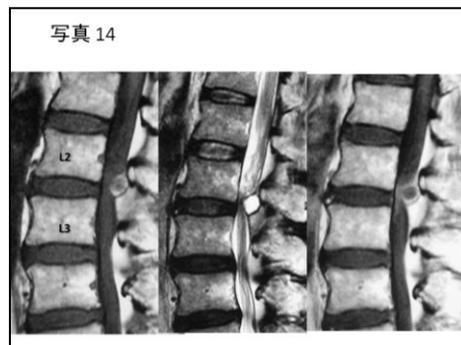
解答 L2/3 より annulus fibrosus を破り上方に逸脱した椎間板ヘルニア (sequestered disk from L2/3)

問題 2(写真 14)

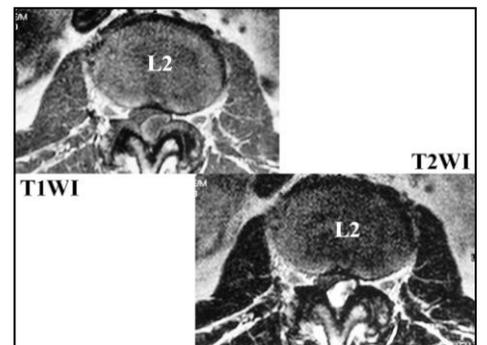
症例：50 歳台の男性

主訴：腰痛と間欠跛行

現病歴：元来鉄工業で仕事をしてきたが、屈む仕事や重い物を持つ機会が多かった。腰痛が徐々に強くなり、両下肢のシビレと脱力感が進行し



(写真 14)



(写真 14-2)

て、間欠跛行をするようになった。これを回避するために歩行が前屈歩行に変化していた。

MRI では T1WI では L2/3 の硬膜の背側に腫瘤は存在してやや high intensity を呈する。T2WI では high intensity の mass に見られ、造影では ring enhancement される

解答 滑膜嚢胞 (synovial cyst)

関節を包む滑膜の変性し、逸脱して脊椎管を圧迫する。嚢胞内は高タンパクの液が溜まっていることもあり、重労働者に発生しやすい。MRI の所見は特徴的である。

問題 3(写真 15)

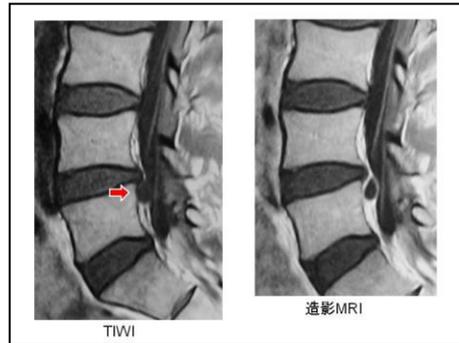
30 歳台、男性

主訴：右下肢への鈍い痛み

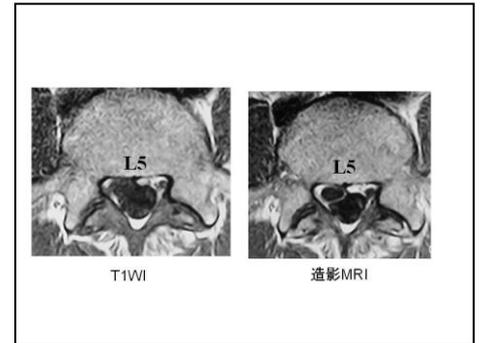
現病歴：3 年前にオートバイにて走行中に転倒して腰部を打撲した既往があり、その頃より腰部の鈍痛があった。

最近同じ姿勢をと比較的長

い時間とると右下肢外側への痛みが発現し、その後も鈍痛が持続する。



(写真 15)



(写真 15-2)

MRI では T1WI では low intensity, T2WI では均一な high intensity に描出され、造影 MRI では low intensity mass を囲むように ring formation を形成している。

解答 Premembranous hematoma

腰椎椎体の後面に薄い premembranous membrane が存在し、椎間板ヘルニアや外傷などを契機にその部位に小出血がおこり、機序は不明だが、慢性硬膜下血腫のように増大して神経根を圧迫する病態である。手術ではこの嚢胞内にはキサントクロミーの黄色の液が排出された。また membrane からは古い出血の一部が組織所見で観察された。